

新型コロナウイルスにまつわる体験記を募り、本や冊子にまとめる動きが出ている。当たり前前の生活が一変し、苦悩する人々のメッセージを後世に残したいとの願いを込める。(島香奈恵、古岡三枝子)

闘病記を中心とした自費出版を手がける星湖舎(大阪市)は7月、「新型コロナウィルス感染症体験記」を刊行した。

「著名人でも専門家でもない、ごく普通の人々の記録を手にとれる形で残したい」と考えた代表の金井一弘さん(66)が昨年11月からホームページなどで募集。感染した当事者や遺族、影響を受けた若者ら10〜80代の11人が寄稿した。

△新聞に掲載されている「数独」を、救急車に乗る前に「帰ったらするから、残しておいて」と一言だけ残し、最期になるとは思いもしないから、明るく見送りました▽

京都府の女性(65)は昨年5月、感染した夫が入院した日をこう記す。

夫は腎臓病の持病があり、3日目に病状が悪化。体外式膜型人工肺(ECM



星湖舎が刊行した体験記と寄せられた原稿

コロナの苦悩 1冊に

〇)のある病院に転院したものの、6日目に亡くなった。濃厚接触者として自宅待機していた女性もその後の検査で陽性と判明。酸素吸入を受ける状態となり、13日間入院した。夫は立ち会えぬまま火葬され、遺骨となった。

△最期のお別れも収骨もできず、本当に夫の骨なのか。今も数独の新聞は残っています▽

後遺症に苦しんだ女性は体験記募集を知り、走り書きのメモを基に原稿を書き上げた。「思考が停止したように、悲しみの感情は起こらないまま。事実を受け入れようと自分自身のために書いた」と語る。

大阪市の看護師、上田夕貴乃さん(51)は昨年8月に感染した。4日間にわたり高熱と全身の痛み、味覚異常、嘔吐、脱水症状と苦痛が襲い、△死の恐怖までも感じる心身状況▽を経験した。△「今日一日を大切に

闘病、看護 当事者や遺族寄稿

過です」、その気持ちが改めて強くなった▽。今は訪問看護や保健所の疫学調査に携わっている。

神戸市の大学2年、竹村幸子さん(19)は、2020年春の一斉休校や外出自粛で氣力を失い、部屋に閉じこもった。△これが私の生きる世界なのか。現実を受け入れられない毎日。恐怖にのみこまれそう▽

オンラインによる活動の広がりです。少しずつ意欲を取り戻した。△この社会を受け入れながら今できることを探し、前に進んでいきたい▽。防災関連のボランティアを始めたという。

金井さんは「一人ひとりで違う体験や思いが詰まっており、貴重な資料になる。今後も募集を続けていきたい」と話す。

B6判、72頁、1100円。問い合わせは星湖舎へ電話(06・6777・3410)かファクス(06・6809・2403)で。

男性の介護体験記募る

「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」(事務局・京都市)は、「コロナ禍と『私の介護』」をテーマに今月から体験記の募集を始めた。

コロナ禍では、多くの介護者が感染対策と介護を両立しながら、どのように家族の命と暮らしを守るのかという問題に直面している。介護をしながら困ったこと、励まされたこと、要望などを募る。

ネットワークでは2009年の設立からこれまで6集の体験記を発行。事務局長で立命館大教授の津止正敏さん「写真」は



「声を上げることができない個人の体験は意識的に吸い上げないと、埋もれてしまう。社会の共有財産として蓄積し、何が起きたのか実態を記し、残していくことは意義がある」と話している。

字数は2000字以内、締め切りは12月31日。詳しい応募方法はネットワークのホームページで。問い合わせは事務局(075・4666・3306、水曜午後1〜4時)。

*「医療ルネサンス」は必ず掲載します。

くらし 家庭